

綾歌町内遺跡発掘調査報告書

第 5 集

平成12年度国庫補助事業報告書
西長尾城跡

2001. 3

綾歌町教育委員会

はじめに

我が綾歌町には、縄文時代晚期以降の各時代に、先人の手によって築かれた文化遺産が数多く残されています。なかでも弥生時代前半期から古墳時代前半期にかけては、近年の発掘調査により、かなり密度の高い内容であることが確認されています。

町及びその他の開発事業等に伴って発掘調査された様々な遺跡について、さらに調査研究を重ね、古代の生活等を明らかにするとともに、遺跡の保護・活用を図り、永く後世に伝えることは、私達に課せられた使命であると考えます。

綾歌町では、平成8年度より国庫補助ならびに県費補助によって綾歌町内遺跡発掘調査事業を実施しており、今年度についても継続して実施し、その調査成果として、この報告書を発刊することになりました。

今年度は、岡田上国吉地区に所在する中世城郭として名高い西長尾城跡の分布確認調査を実施しました。昨年度までの調査で主郭を中心とした連郭式郭列の展開している範囲について、ほぼ確認することができており、今年度はその南東部に所在するヤグラから東部に展開する削平地の確認をしました。一部、未調査部分も残りますが全体的な遺構分布状況が把握できてきたことによって、西長尾城の内容解明に向けた資料整備も着々と進んできました。

これからも、我が綾歌町に所在する貴重な文化遺産を、後世に伝えていくためにも、調査の成果が貴重な資料として活用されることを望みつつ、当事業の継続的な実施を予定しております。

平成13年3月30日

綾歌町教育委員会教育長 土岐道憲

例　　言

1. 本書は、綾歌町教育委員会が、平成12年度国庫補助事業として実施した綾歌町内遺跡発掘調査の概要報告書である。
2. 今回の遺跡発掘調査は、西長尾城跡を対象とした。
3. 西長尾城跡の現地測量調査は、綾歌町教育委員会近藤武司の監督の元、綾歌町教育委員会新居勉が行い、資料整理及び本書の執筆については、近藤が行った。
4. 本書の測量図の縮尺は、スケールで表示した。また、方位は国土座標第IV系による方位で示した。
5. 実測図面は、綾歌町教育委員会に保管している。
6. 挿図については、国土地理院の25,000分の1地形図を調整した綾歌町管内図（承認番号 四複第134号）及び綾歌町航空測量図を使用した。

目 次

本文 目 次

第Ⅰ章 平成12年度綾歌町内遺跡発掘調査事業概要	1
第Ⅱ章 西長尾城跡測量調査	3
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3
3. 調査に至る経緯	4
4. 地形の概要	4
5. まとめ	8
第Ⅲ章 まとめ	14

挿 図 目 次

第1図 平成12年度綾歌町内遺跡発掘調査事業対象地	2
第2図 西長尾城縄張り図	5
第3図 西長尾城跡東尾根測量図	7
第4図 西長尾城跡測量・遺構分布図	折込

表 目 次

第1表 遺構一覧 (No.1)	9
第2表 遺構一覧 (No.2)	10
第3表 遺構一覧 (No.3)	11

図 版 目 次

図版1 測量調査風景(西から)	12
図版2 第28郭上部(南西から)	12
図版3 第28郭東堀切(北から)	12
図版4 東尾根削平地(西から)	13
図版5 鞍部から第28郭を望む(北西から)	13
図版6 第28郭から主郭部を望む(南東から)	13

第Ⅰ章 平成12年度綾歌町内遺跡発掘調査事業概要

平成8年度から国庫及び県費補助金によって、綾歌町内に所在する遺跡の確認調査を実施しており、今年度についても同事業を継続して実施することになった。

国庫補助申請については、平成12年4月17日付けで提出し、平成12年6月9日付けで交付決定を受けた。

県費補助申請についても、同じく平成12年4月17日付けで提出し、平成12年8月4日付けで交付決定を受けた。

今年度については、岡田上字国吉所在の西長尾城跡分布確認調査を実施した。

西長尾城跡は、中世城郭として著名な遺跡であり、郭や堀切など、様々な遺構が比較的良好に残存している。古くからの調査によって大まかな遺構分布状況が報告されているものもあるが、精度に欠けており、町教委としては、今後の適切な保存・活用をするための基礎資料を作成するために平成8年度から平板測量による遺構分布確認調査を実施している。昨年度までの調査で本丸を中心とした連郭式郭列の分布する主郭部の概要是つかめていたので、今年度はその南東部のヤグラ付近から東の尾根上の削平地の測量を実施した。

本丸を中心とした主郭部は堀・郭の切岸を組み合わせ、密に防衛施設を備えているが、南東部の鞍部を隔てた『ヤグラ』から東は、延長160mに及ぶ広大な削平地が続く。東の先端部に二重堀切等を備えるが、主郭部とは明らかに様相が違う。東の高大な削平地は、陣城としての性格が強いようである。削平地の北肩は、森林公園管理道によって掘削を受けており詳細については不明であるが、南肩の状況や北側斜面の踏査状況から推察すると防衛を目的とした施設は無かったと考えられる。

今年度の調査では、時間的な制約もあり、尾根上の遺構を全て測量するまでには至らなかったが、『ヤグラ』付近から東に延びる削平地については大まかな分布状況を把握することができた。

町では、次年度以降も継続して調査を実施し、他の箇所についても構造解明できるよう努めていきたい。

以上、町内1箇所で測量調査を実施した。また、平板測量は約7,000m²の範囲で実施した。

平成12年度の町内遺跡発掘調査事業は、平成12年6月1日より実施し、平成13年3月30日に終了した。

第1図 平成12年度綾歌町内遺跡発掘調査事業対象地



西 長 尾 城 跡



第Ⅱ章 西長尾城跡測量調査

調査対象地 綾歌町岡田上字国吉 2312-10, 2312-13

調査期間 平成12年9月1日～12月30日

調査面積 約7,000m²

1. 地理的環境

綾歌町は、肥沃な丸亀平野の東南部に位置し、阿讃山脈の最前線をなす高見峰、猫山、城山の連山を南限とする。町北東部については、横山連山が南北に延びており平野部からの眺望は遮られている。北西部は土器川沿いの沖積平野に向かい、幾筋もの洪積台地の尾根筋が延びており、起伏に富んだ複雑な地形を形成している。

町中央部については、南方の連山に源を発する大東川水系により盆地状の沖積平野が広がっており水利の便もよく、阿野郡条里の方格地割が現在においても良好に残存している。

西長尾城跡は南部の連山の中でも西端に位置する標高375.2mの城山(Siroyama)丘陵部に位置する。頂上からの視野は、東部については城山と同じ丘陵に連なる猫山、高見峰により視界を遮られるが、その他の方位については広く眺望することができる。

また、城山の南、西、北面は急峻な要害地形をなし、丘陵尾根や斜面上部を加工し、郭等の防衛施設の役割を果たしている。

2. 歴史的環境

綾歌町では近年の発掘調査により、平野部で縄文時代晚期の生活用土器が発見されるようになってきたことから、少なくとも3,000年前頃には人々の生活が行われていたことが分かってきた。

弥生時代になると、行末遺跡に代表される前期の集落遺構が確認されている。後期に入ると次見遺跡や下土居遺跡また近年の発掘調査では行末西遺跡、佐古川遺跡、椎尾遺跡、椎尾東遺跡、佐古川・窪田遺跡でも集落遺構が発見されている。このような人口と生産力の増大を背景に造墓活動も活発に行われてきたようで、南部の丘陵部に平尾墳墓群、石塚山古墳群、定連遺跡等が築造されている。また、近年の発掘調査では、佐古川・窪田遺跡で最古級の周溝墓群が発見されている。

古墳時代に入ると、町の西部では岡田万塚古墳群、北原古墳のように多種多様な古墳が築造されている。東部では快天山古墳、陣の丸古墳群、横山古墳群、横峰古墳群等が築造されている。また、集落遺構としては行末西遺跡、佐古川遺跡、椎尾遺跡、佐古川・窪田遺跡が確認されている。

特に、弥生時代後期から古墳時代にかけては、遺跡の密度も高く非常に栄えていた時期であることがうかがえる。

古代には、原遺跡、北原遺跡で集落が確認されている。

中世に入る頃には坂出市との境をなす横山山頂に横山廃寺が建造され、後半期に入ると

南部連山の城山に西長尾城が築城される。また、集落としては近年の調査で岡田台地に北山遺跡が確認されている。

西長尾城は、三野郡詫間郷笛御崎を領して海崎伊豆守と名乗り白峰合戦での軍功を認められた長尾大隅守元高が応安元年（1368）に城主となり、その後土佐の長宗我部元親配下の国吉甚左衛門が居城した。天正13年（1585）の豊臣秀吉の四国征伐により廃城になるまでの二百年以上に渡って長尾一族及び長宗我部一族によって守られてきた城である。

その間に、長尾一族はこの地で勢力を伸ばしており、炭所、岡田、栗限などに支城を構えて阿野、鵜足、那珂郡の南部で勢力を誇った。

3. 調査に至る経緯

綾歌町は、岡田上園吉地区から栗熊西平尾地区に至る約250.34ヘクタールを綾歌町森林公園として整備を進めているところである。この中には城山を中心に広がる中世城郭跡の西長尾城跡の整備に関する計画も含まれており、どのような形で計画を進めていくのかを現在検討しているところである。

西長尾城について記述のある文献もあり、現在、西長尾城保存会を中心とした研究をしているところであるが、現地の遺構状況については不明なところが多いことから町教育委員会では適切な調査を実施し、西長尾城の内容を把握したうえで整備計画を進めていくため平成8年度から平板による測量調査を実施して、基礎資料作成作業にとりかかっており、5年目となる今年度についても同事業を継続して実施することになった。

測量調査にあたって、測量調査体制を整えると共に、香川県西部林業事務所及び高松営林署と協議により測量調査のための立木伐採の許可を得て、平成12年9月1日より本格的な調査に入った。

立木伐開作業については、綾歌町シルバー人材センターへの作業委託とし、平成12年11月6日から24日までの期間で実施した。

新たな伐開範囲は、本丸のある主郭部から南東に下ったところにある鞍部付近から『ヤグラ』を隔てて東の尾根上に展開する削平地とその南北両斜面部とした。予算・期間等の制約上、刈り取った雑草等は現場から搬出するまではできなかった。

測量については、調査員の業務の都合及び日程的な制約の中でスムーズに進行したとは言いがたいが、伐開した約7,000m²について大部分の調査を実施することができた。これにより、途中、抜けている箇所もあるが本丸から南東部の『ヤグラ』を隔てて東尾根の削平地までの遺構分布状況を押さえることができた。

4. 地形の概要

昨年度までに実施した遺構分布確認測量調査によって約19,000m²については遺構の分布状況が確認できている。

山頂部より北東方向に2筋の稜線が走っており、その東側の尾根上には連郭式郭列が大小合わせて10段設けられ、最下部は堀切によって断ち切られている。西側の尾根上にも同様に連郭式郭列が12段連なっている。

東側の郭列については、下から3段において南東肩に高さ1メートル、長さ30メート



第2図 西長尾城縄張り図 ($S = 1 : 4,000$)

ルに渡る土塁が造られている。また、西側の郭列についても、同様に北西端にそれぞれの郭を連結するように土塁が設けられている。このことから推察すると、北からの攻撃に対する防御と併せて、東西側面からの侵攻に対しても警戒していると考えられる。

これらの両尾根筋の間には、唯一の水源となる谷筋があり、加工によって平坦地になっている。この平坦地には4基の井戸が設けられていることから水の手郭の役目を担っているものと考えられる。これらの井戸は、積石も若干見られるが水深がなく湧き水を汲み上げるものではなく地表を這う雨水等を溜めて利用するものと考えられる。

水の手郭の奥には斜面に大小12条の連続する畝状の堅堀が検出されているが、これらの用途については確認できていない。推測としては、城内の侵攻を遮るためにものと考えている。

西側の連郭式郭列については、郭と郭の段差は概ね2メートル前後で奥行き10メートル、幅15メートル前後のものが北東に向かって連続して設けられており、その中间部分にあたる5段の郭列の西肩部分は土塁によって連なっている。また、この土塁からそれぞれの郭に進入できるように通路状になっていることから、この土塁は城内移動用の通路及び各郭への虎口も兼ねて設置しているようである。

更に、この西側の郭列において西長尾城の旧城から新城への変遷における改築の痕跡を確認することができる。第17郭から第19郭については下段の郭に面する肩部分が直線状に整形されており、そのそれぞれが平行に調整されていることから計画的に手を加えているものと考えられる。

城内移動用の通路については、完全には判明していないが部分的には確認できつつある。今回調査を実施したのは城山頂上から北東尾根に連続する連郭式郭列からは南東に少し距離を置いたところにある鞍部に差し掛かる手前に所在する連郭式郭列及び鞍部の北東部の

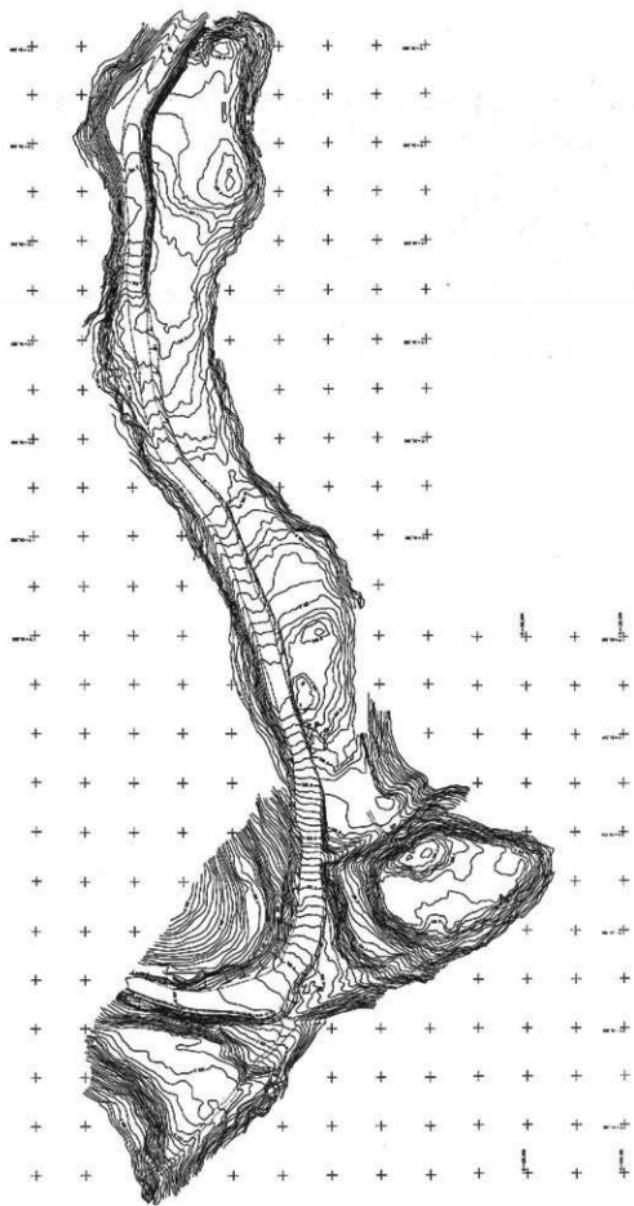
ピークに所在するヤグラ付近、その東部の堀切から東尾根に展開する延長170メートル程の削平地である。

まず、主郭部の南東部に位置する標高329メートルの鞍部を隔てたところにある『ヤグラ』と呼ばれる標高339メートルのピークに南北33メートル、東西22メートルの平坦地（第28郭）が設けられている。この西端に東西5メートル、南北8メートル、高さ1.5メートル程の高まりがある。以前はこれが単なる土壘であると考えられていたが、その形状から考えると櫓台であると捉えた方がよいであろう。第28郭の北西部は2段の連郭式郭列を経て鞍部に降りる。更にその主郭側は大小3段の郭が連続する。最上段にあたる第23郭は標高が339メートルで櫓台のある第28郭と同レベルである。このことから考えると第23郭から第25郭は本丸を中心とした主郭に付随するものではなく第28郭のヤグラに関連するものであると考えられる。また、この鞍部から南側には通路が延びており、従来は城主の居館であったと考えられている超勝寺付近との連絡道であると考えられる。また、鞍部の南部には比較的幅員のある谷筋が下っており平野部から城内に進行してくるルートのひとつであると考えられる。その両方を挟み込むような配置となっており、重要な役割を担っていた箇所であると推察できる。

第28郭の櫓台の東側には堀切が設けられており、その切岸は5メートル以上の比高を計る。この堀切は比較的側面への延長があるようでその東の削平地とは一線を画しているようである。

堀切から東部は、起伏は見られるものの一連の削平地が展開している。その北辺は、町が森林公園整備に伴う管理道設置により掘削及び盛土によって原形を留めていないが、残存部分で測ると広いところで20メートル、狭いところでも8メートルの幅員を持つ。本来であればあと4~6メートル程広かったものと考えられる。延長は170メートルで最大3メートルの比高差の起伏を持つが、旧地形を利用したものであったり、岩盤露出による掘り残しであったりと意識的に高低差を設けているものではないと考えることができる。しかし、この削平地の東先端付近の3.5メートル程（第30郭）は少し様子が違つており、ヤグラと思わせる状況が見られる。まず、第28郭の櫓台程の規模は持たないものの東先端部に高まりを持つことがあげられる。これは他の箇所で見られるような土壘というものは明らかに異なるものであり第28郭同様櫓台と考えるのが適当と思われる。更に南肩に土壘状の高まりがあることも以西の削平地には見られない特徴である。また、森林公園管理道整備により一部破壊されているが、櫓台の北側に樹形が備えられている。この東面には段差を設けて二重堀切が設けられており、東方面から城内へ進入するための玄関口となっていることから手の込んだ設備となっているのであろう。ちょうどこの位置からは第28郭及び本丸を直視することができる。

第28郭及び第30郭の間の削平地は、南北両斜面は元々急峻であることが要因しているのか特に防御的性格の装備がなされていない。踏査の結果、この削平地から北に延びる尾根上にも削平地化の痕跡が残っていることから、この削平地の主な用途は数千の兵を居城させるための陣城的要素が強い。



第3図 西長尾城跡東尾根測量図 ($S = 1 : 1,000$)

5. まとめ

中讃を一望できる位置に所在する西長尾城は自然の要害地形を巧みに利用し、更には複雑な防塞施設を備えていたり巨大な収兵エリアを設けることによってより一層協力な防衛力を保持している。

平成8年度からの調査によって、西長尾城の遺構配置状況が着々と解明しつつある。これらの成果は、今後の調査結果と併せることにより、この地域における中世城郭の研究課程において、模範と成り得る貴重な資料になると考えられる。

しかし、未だ未調査部分も残っていたり、各方向からの検証が必要であったりと今後の課題も残されていることから、次年度以降についても当該調査を継続して実施していくことにより、西長尾城についての基礎資料の整備を早急に進めていきたい。

第1表 遺構一覧

(No.1)

遺構の所在地	名 称	形 状	規 模 (m)	上段與との 高低差 (m)	備 考	名 称	場 所	郭等の付属施設		規 模 (m) 奥行き×幅×高 さ (深さ)	備 考
								石	壁		
山頂部	本丸跡	台形	23.0×22.0		礫石と思われる石が敷布 以前瓦の敷布もあった						
山頂部の東尾根	第1郭	三角形	18.1× 5.2	7.5	登山道で一部破壊						
	第2郭	三角形	6.5× 4.0	4.5	登山道で一部破壊						
	第3郭	不定形	12.0× 5.0	0.8	登山道で一部破壊						
	第4郭	不定形	14.5× 5.3	2.0	登山道で一部破壊						
	第5郭	不定形	29.5× 7.8	2.3	登山道で一部破壊						
	第6郭	不定形	30.1× 9.5	2.5	登山道で一部破壊						
山頂部の北東尾根 (東側)	第7郭	不定形	28.8× 2.0	2.3	登山道で一部破壊						
	第8郭	不定形	30.5× 7.2	3.2							
	第9郭	不定形	37.0× 8.0	2.1							
	第10郭	不定形	18.0× 8.7	2.3							
								土塁	南東脇	28.6×4.0×1.0	
								土塁	北東脇下	5.5×2.0×0.5	
								腰郭	北東段下	27.6×7.7×1.0	
								場切	北西段下	16.0×5.5	
								壁	北東段下	30.2×2.0×1.5	
								塙堀	場切と連続	20.9×8.0×3.3	

遺構の所在地		名 称 形 状		規 模 (m)	上段郭との 高差共 (m)	備 考	名 称 場 所	規 模 (m)	奥行き×幅×高 さ (深さ)	備 考
山頂部の北東尾根 (西側)	第 11 郭	不定形	13.3×3.0	4.8						
	第 12 郭	不定形	33.0×7.3	4.0						
	第 13 郭	三角形	11.5×6.0	2.2			積石列	南西側法面	13.5×2.0	
山頂部の西尾根	第 14 郭	不定形	10.5×11.0	9.0	瓦片の散布 登山道で一部破壊		犬走り	東部南北端	幅 1.0	
	第 15 郭	台形	17.2×5.5				虎口	東南端	幅 1.0	
	第 16 郭	台形	13.5×7.4	4.0			虎口	西部両端	幅 1.0	
山頂部の北東尾根 (西側)	第 17 郭	台形	17.0×11.1	3.5	登山道で一部破壊		土塁	北西肩	幅 1.0	
	第 18 郭	不定形	16.6×18.2	2.8	登山道で一部破壊		虎口	東西両南端	幅 1.0	
	第 19 郭	三角形	19.0×12.2	2.0	登山道で一部破壊		土塁	北西肩	幅 1.4	
	第 20 郭	台形	10.0×2.8	3.0	登山道で一部破壊		虎口	東南端	幅 1.0	
	第 21 郭	台形	21.0×9.0	3.5			土塁	南西肩	幅 1.8	
	第 22 郭	三角形	8.7×8.2	4.8			土塁	東西両肩	幅 2.2	

遺構の所在地	名称	形状	規模 (m)	上駿郭との高差 (m)	備考	名稱	場所	規模 (m) 奥行き×幅×高さ (深さ)	郭等の付属施設	備考
山頂部の南東尾根	第23郭	台形	11.0×6.0	14.0						
	第24郭	台形	31.5×19.0	3.0						
	第25郭	三角形	17.5×12.0	1.3						
東尾根の西端	第26郭	台形	18.5×12.0	3.0						
	第27郭	長方形	25.0×5.2	3.7						
	第28郭	不定形	21.0×32.0							
山頂部南東鞍部	第29郭	台形	19.0×5.0	3.2						
	第30郭	方形	36.0×20.0							
	削平地	不定形				延長 136				





図版1 測量調査風景（西から）



図版2 第28郭 上部（南西から）



図版3 第28郭東握切（北から）



図版4 東尾根削平地（西から）



図版5 鞍部から第28郭を望む（北西から）



図版6 第28郭から主郭部を望む（南東から）

第Ⅲ章 ま と め

綾歌町では、平成8年度から国庫及び県費補助により綾歌町内遺跡発掘調査事業を実施しており、今年度についても継続して実施することになった。

今年度については、岡田上国吉地区に所在する西長尾城跡を調査対象として実施した。西長尾城跡は、岡田上国吉地区に聳える城山山頂を中心に展開する中世城郭として古くから知られており、部分的に後世の開発等により破壊されているものの、ほぼ当時の姿を現在まで伝えている。

綾歌町が実施する森林公園整備計画を進めるなか、その範囲内に所在する西長尾城跡の取り扱いについて様々な論議が交わされているが、西長尾城の遺構分布状況が把握できていないことに伴い、調整作業も滞っている状況である。

町教育委員会では、基礎資料を整備するために平成8年度から西長尾城跡に遺構分布確認調査を実施している。

調査は、平板測量による遺構分布確認調査で、昨年度までに本丸跡を中心とした連郭式郭列の展開する主郭部の測量を終えている。今年度はその南東の鞍部を隔てた場所に位置する『ヤグラ』と呼ばれるピークとその周辺及び東の猫山に向かって延びる尾根上に展開する削平地の併せて約7,000m²の測量を実施した。

今回の測量については、調査地が満濃町との境に位置していることから、境界の屈折点等に杭が設置されており、それらの杭を測量基準点として利用した。また、一部は昨年度の調査時に新規の測量基準点を設置していたり、既設の杭を測量していたので地籍調査の成果との調整を図ることができた。

今年度の測量調査の結果、本丸跡の所在する城山山頂から南東に下ったところにある鞍部を隔てたピーク部に所在する削平地は伝承されてきた呼称のとおり『ヤグラ』であることが判明した。十分な広さを確保したうえで東尾根に面する位置に櫓台を設置している。周囲には土塁を廻らせており虎口も樹形となっている。東段下には堀切が設けられており重装備になっていることから重要な役割を担っていた箇所であることがうかがえる。また、本丸のある主郭部側にはヤグラと同じ比高までの平坦地が設けられている。城外からの進入路のひとつと考えられる鞍部に対してのものかどうかは不明であるが、この位置が重視されていることは否定できない。

ヤグラの東尾根上には削平地が東端の第30郭までの136メートルに渡り続く。2,000m²以上の平坦地がこの尾根上に設けられているのである。特に防衛的要素は兼ね備えていないので陣城としての役割を担っていたものと考えられる。

削平地の東に位置する第30郭は、西のヤグラと似通っており、やはりヤグラとして機能していたものと考えられる。装備としては、櫓台・土塁・樹形虎口と側面に堀切を持ち第28郭と同内容となっている。

本丸周辺の連郭式郭列及び空堀等は、本丸への侵攻を防御する役割が主であるのに対して、東尾根削平地の東西両脇に備えられているヤグラ及びその周辺施設については基本的に城外から城内への進入に対する城門的機能が主となっているようである。また、広大な

削平地を有することにより、多勢の兵力を保持することができるようにもなっている。

以上、今年度は開発に伴う緊急調査がなかったことから西長尾城跡の測量調査のみを実施した。当調査については、次年度以降についても継続して実施し、早期に西長尾城の全体像を掴めるような資料づくりをしていきたいと考えている。また、今までの調査で得た資料は、次回の調査等に効率的に活用していきたい。

報告書抄録

ふりがな	あやうたちょうないいせき はっくつちょうさ ほうこくしょ							
書名	綾歌町内遺跡発掘調査報告書							
副書名	平成12年度国庫補助事業報告書							
巻次	2001.3	シリーズ名	綾歌町内遺跡発掘調査報告書	シリーズ番号	第5集			
編集者名	綾歌町教育委員会 近藤 武司							
編集機関	綾歌町教育委員会							
所在地	〒761-2492 香川県綾歌郡綾歌町栗熊西 1638 TEL 0877-86-5963							
発行年月日	2001年 3月30日							
頁数	例言・目次等	本文	挿図	表	図版	総頁		
	4頁	15頁	6枚	3枚	4枚	19頁		
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	°°°	°°°			
西長尾城跡	綾歌町岡田上 字国吉 2312-10 2312-13	37384	00035	34度 12分 1秒	133度 52分 11秒	2001.9.1 ~ 2001.12.30	約7,000	遺跡分布調査
所 収 遺 跡 名	種 別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項		
西長尾城跡	城郭	室町		郭 堀切 井戸 土器	瓦片 土師器片			

平成12年度国庫補助事業報告書

綾歌町内遺跡発掘調査報告書

平成13年3月30日

編集・発行 綾歌町教育委員会

綾歌郡綾歌町栗熊西1638

電話(0877) 86-5963

印刷 四国工業写真株

四面